

様式第2 (第12条関係)

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況 (内規第11条 活動報告)

団体名	和	海洋研究科学委員会
	英	Scientific Committee on Oceanic Research (略称 SCOR)
	団体 HP (URL)	http://www.scor-int.org/ (日本学術会議が加盟していることの記載 <input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無)
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	SCORは、財政支援は受けていないがその母体である ICSU が導入した最初で唯一の海洋研究に関する学際的組織である。昨今、人間活動に伴う地球環境や生態系の変化、変動や地球気候の変化、変動における海洋の重要性から益々その役割が増大している。こうした背景のもとで人間活動とモンスーンや気候変動が輻輳するインド洋において学際的な国際調査研究 IIOE-2 が 2015 年 12 月にユネスコ政府間海洋学委員会 (UNESCO IOC) との共同で 50 年ぶりに開始された。これまで推進してきた大型国際計画 GEOTRACES, SOLAS, IMBER, GEOHAB などに加えて、人間活動に起因する海洋内部の騒音と海洋生態系との関係解明など新しい視点からの研究計画 (IQOE) も始まっている。	
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について	温室効果気体の増大に伴う海洋中の炭素循環や海洋酸性化と生態系の関係などを明らかにする海洋生物地球化学の国際計画 IOCCP をユネスコ政府間海洋学委員会と連携して推進しており、IPCC に基盤的な面から大きく貢献している。海洋物理、化学観測に不可欠な標準海水の国際新基準 (TEOS-10) の導入も重要な貢献になっている。特に SCOR は海洋科学研究を国際的に推進するために作業委員会を国際公募し、毎年 3 件程度を選んで 3-4 年間にわたり研究助成を行って来た。これまでに 150 件の作業委員会が助成を受けて、海洋科学の様々な先端的テーマを国際共同により推進してきたことは特筆すべきである。SCOR はまた日本財団の支援を受ける POGO (Partnership for Observations of the Global Ocean) 等と連携して客員教授、フェローシップ制度の導入や途上国研究者の国際会議への参加支援等を行っている。	
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて	我が国は SCOR における最重要国 (米国、ロシア、日本) の一つであり、幹部役員 (副議長など) を度々務めるとともに、総会、執行理事会において作業委員会選定、途上国支援、ジェンダーバランス、財務関係等において活発な発言を行っている。平成 14 年には POGO に客員教授の枠を設けたのは我が国もイニシアティブである。SCOR が ICSU に推薦した津波専門家は日本からの提案による。最近では青山道夫 (現 福島大学) らが提案した海洋栄養塩測定比較実験と認証標準物質 (CRM) の導入に関する作業委員会 (WG147) が活発な活動を行っている。またインド洋の学際的な国際調査研究 IIOE-2 は山形俊男らの	

様式第 2 (第12条関係)

	インド洋の気候変動であるダイポールモード現象の発見が重要な契機となっている。
加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への効果やメリットについて	<p>SCOR は ICSU の下で、学際的な海洋科学における唯一の学術団体であり、我が国はこれまで IGY, IIOE-1 (インド洋調査), CSK (黒潮調査), IBP (国際生物計画) などに積極的に参加、また主導して国際共同研究の実績を積み上げ、海洋科学面における国際信用を高めてきた。最近では IGBP など北西太平洋における研究に主導的な役割を果たし、GEOTRACE 計画においても主要参加国として成果を発表して、わが国の研究への国際的信頼を勝ち得ている。SCOR に加盟し、大型国際研究の最新情報の交換の場として、また先端海洋科学を競い合う場として活用することは、日本学術会議傘下の日本海洋学会、日本地質学会、土木学会、日本海水学会、日本気象学会、日本地球化学会、日本水産学会、水産海洋学会、日本プランクトン学会、日仏海洋学会、日本海洋政策学会などの学術、社会啓発活動、ひいては国民や社会の海洋科学への理解の増進に向けて多大なメリットがあるといえる。</p> <p>学術面に加えて、我が国が海洋国家として海洋科学の国際組織において重要な立場を持続的に展開していくことは、国家管轄権外区域の海洋生物多様性 (BBNJ) 問題などで、国連海洋法条約が海洋科学に基づいた新しい枠組みの構築に向かっている折からも極めて重要であることも力説したい。2012 年にリオデジャネイロで開催された国連持続可能な開発会議 (Rio+20) で採択された成果文書「我々が求める未来 (Future We Want)」が「BBNJ の保全と持続可能な利用について、国連海洋法条約の下で新協定の採択を含めて早急に取り組む」と明記したことに基づき、2015 年 6 月に国連総会は「BBNJ の保全と持続可能な利用に監視、国連海洋法条約の下の国際的な法的拘束力のある文書を作成する」と決議しているからである。</p>
その他 (若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など)	SCOR は若手研究者の育成、男女共同参画の推進、途上国研究者への配慮、地理的バランスなどを重要な指針としている。作業委員会の選定においてもそのような配慮がなされていないものは低い評価を受ける。科学者の倫理に関する基本方針は母体である ICSU の方針に準じている。

2 今後の予定について (内規第 11 条 活動報告)

総会、理事会の日本開催の予定について (招致等の予定も含め)	2002 年に総会を札幌に招致して以来、久しく時が経過しているため日本開催の可能性について打診されている。既にポーランド、南アフリカ、英国の順で総会、執行理事会の開催が決まっているので、その次あたりに招致すべきと考えている。
日本人の役員立候補等の予定について	今年で議長 (英国)、副議長三名 (ロシア、中国、ブラジル) の任期がくるが、副議長二名 (ロシア、中国) は現一期目で

様式第2 (第12条関係)

	あるため再選される可能性が高い。副議長に立候補の可能性を事務局と意見交換中である。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	作業委員会の国際公募が始まっており、学会等に広く提案を募っている。

3 国際学術団体会議開催状況 (内規第11条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去5年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	2010年(開催地: トゥールーズ)、2012年(開催地: ハリファックス)、2014年(開催地: プレーメン)、2016年(開催地: ソポト)		
	理事会・役員会等開催状況	2011年(開催地: ヘルシンキ)、2013年(開催地: ウェリントン)、2015年(開催地: ゴア)、2017年(開催地: ケープタウン)		
	各種委員会開催状況	2011年(開催地: フォートローダーデル他10件)、2012年(開催地: ソールトレイク他7件)、2013年(開催地: ニューオーリンズ他11件)、2014年(開催地: ホノルル他14件)、2015年(開催地: プレスト他12件)、		
	研究集会・会議等開催状況	2011年(開催地: パリ他2件)、2012年(開催地: クレエルム他5件)、2013年(開催地: ゴア他1件)、2014年(開催地: ベルゲン他1件)、2015年(開催地: キール他3件)、		
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	<p>総会、執行理事会のみ記す。</p> <p>2011年、執行理事会(ヘルシンキ)、2人(うち代表派遣: 池田元美)</p> <p>2012年、総会(ハリファックス)、3名(うち代表派遣: 池田元美、蒲生俊敬)</p> <p>2013年、執行理事会(ウェリントン)、3名(うち代表派遣: 蒲生俊敬)</p> <p>2014年、総会(プレーメン)、3名(うち代表派遣: 蒲生俊敬)</p> <p>2015年、執行理事会(ゴア)、2名(うち代表派遣: 山形俊男)</p> <p>2016年、総会(ソポト)、2名(うち代表派遣: 山形俊男)(予定)</p>			
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況(過去5年)	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
	副議長	2011~2014	田口 哲	(22期)会員・ <u>連携</u>
		~		()期)会員・連携

様式第2 (第12条関係)

		～		(期) 会員・連携
		～		(期) 会員・連携
		～		(期) 会員・連携
		～		(期) 会員・連携
		～		(期) 会員・連携
出版物	1 定期的 (年 4 回) 出版物名 SCOR Newsletter (年 1 回) 出版物名 SCOR Proceedings 2 不定期 (SCOR 作業委員会報告等) 主な出版物名 Special Issue of <i>Marine Chemistry</i> (Volume 173, Pages 1-342) など			
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 (http://www.scor-int.org/SCOR_Publications.htm)				

様式第2 (第12条関係)

4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第3条、4条、5条)

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	SCOR 分科会
	委員長名	山形俊男
	当期の活動状況	<p>(開催日時 主な審議事項等)</p> <p>2015年4月8日:</p> <p>委員長に山形俊男連携会員、副委員長に窪川かおる連携会員、幹事に蒲生俊敬連携会員を選出した。東京大学大気海洋研究所の研究船共同利用運営委員会・協議会の委員に関して平成16年の法人化前の状況も確認しつつ、SCOR分科会と大気海洋研究所との位置づけを明確化すべきことが指摘された。2015年12月7-9日インド、ゴアでSCOR執行理事会が開催されるが、山形委員長が出席する予定である。3月13日付でSCORのEd Urban事務局長から2016年度発足のSCOR作業部会提案書募集の案内が届いていることから、この締め切り(6月15日)後に、本分科会を開催し、作業部会提案書の内容を評価し、事務局に提出することとした。青山道夫オブザーバーからSCOR作業部会Working Group147(COMPONUT)について現状報告を受けた。マルコム・ウッドワード(英国)と2名で共同議長となり、栄養塩変動の測定・解析に不可欠な標準物質の開発と確立、および標準物質を使った測定法の確立と評価を完遂し、それらの普及を進める予定である。国際共同実験での検証を続け、栄養塩を基本パラメーターとして多様な研究への発展が見込まれる。標準物質(CRM)の完成に20年、国際共同研究に8年を費やしたこと、みらい航海で13のラボが試用してきた。提案書作成のコツとしては、ジェンダー・国際性・先進国と開発途上国のバランス、成果の将来性、メンバーの将来性、Associateメンバーの構成と将来性などを考慮することが大切であることなどの解説があった。新野 宏委員から学術研究船について、油価高騰と運営費削減などの理由による運航日数の激減は基礎海洋科学の発展と後継者育成への重大な障害となると危惧されることから、緊急に解決策を図る必要があるとの説明があった。学術研究船だけでなく海洋研究開発機構(JAMSTEC)の他の船舶についても同様の問題点があること、大気海洋研究所とJAMSTECとの情報交換の促進、学術会議の海洋関連分科会・小委員会との間で問題を共有化すべきことなどが指摘された。これらの意見を背景にして水産・海洋科学研究連絡協議会で現状説明を行い、解決への協力を依頼することになった。SCOR分科会の活動の一部として、旧海洋科学研究連絡委員会が海洋基礎科学の発展への寄与を掲げていたことを継承して問題解決にあたるのがよいとの指摘があり、学術会議から「記録」として発信する可能性を調べることにした。また山形委員長からSIMSEA国内委員会をSCOR分科会の小委員会として設置する提案があり、意見交換の後、了承した。5月の日本学術会議幹事会に提案を出し、委員委</p>

様式第 2 (第12条関係)

	<p>嘱に進み、早ければ6月か7月の幹事会で承認される見込みとなる。</p> <p>2015年8月27日：</p> <p>SCOR 作業部会プロポーザル 10 件について全委員で分担した査読結果の取りまとめを行い、must fund 3 件、may fund 4 件、do not fund 3 件を決定、9月末に SCOR 事務局に報告した。平成 27 年度学術研究船（白鳳丸、新青丸）の運行実施予定の報告があり、運行日数の深刻な状況が今後も予想されることから、議論の結果を「報告」としてまとめる必要性を議論した。GEOTRACES 小委員会、及び SIMSEA 小委員会の活動報告を受けた。その他として 2016 年に日本がホストする G7 サミットに関係して開催される G サイエンスに「海洋」をテーマとして取り上げてもらい、「海洋の統合的な理解と持続可能な利用」のために、具体的には「次世代アルゴ計画による全海洋情報網国際協力の強化」を中心に運動していくこと等を議論した。</p> <p>2015年10月15日：</p> <p>SCOR 分科会 SIMSEA 小委員会の第 23 期第 1 回会合を開催し、役員（山形俊男委員長、植松光夫副委員長、遠藤愛子幹事、脇田和美幹事）を決定した。またフィリピン大学海洋科学研究所に設置された国際事務局の状況報告、小委員会の今後の活動、特にフーチャーアースとの連携、他の研究プログラム、プロジェクトとの連携、国内事務局の設置、研究費導入策等について議論した。</p> <p>2016年1月26日：</p> <p>第 42 回 SCOR 執行理事会（議長 Peter Burkill、事務局長 Ed Urban）が 12 月 7-9 日にインドのゴアにあるインド国立海洋研究所（NIO）で開催され、分科会からは委員長の山形俊男と分科会の張 勁委員が出席した。主な議題は以下のとおりであった。a) 現在実施中の作業部会（最長 4 年間）の進捗状況報告、b) 加盟 31 カ国の査読を受けた 10 件の作業部会プロポーザルを評価し、新規作業部会を決定すること（最終的に略称で IQuOD, TOMCAT, COBS の 3 件が認められた。この 3 件についての日本の評価は must fund 2 件、may fund 1 件である。）、c) SCOR 関連事業（GEOHAB, IMBER, GEOTRACES, SOLAS, IQOE, IIOE-II 等の科学プログラム、IOCCP, SOOS 等の海洋科学インフラ、SCOR 能力育成活動、IOC, GESAMP, PICES 等の政府間組織との活動、NGO である ICSU との連携、IABO, IAMAS, IAPSO 等の国際学協会や InterRidge, IOCCG, GACS, POGO 等のプログラムや組織との連携）報告、d) 次期執行部体制の推薦委員会（委員長は前議長の Wolfgang Fennel）の発足、e) 2016 年の総会の場所と日時の決定（2016 年 9 月 5-7 日、ポーランドのソポトにあるポーランド科学アカデミー海洋研究所で行われる）。張 勁委員から作業部会のフルメンバーにより多くの日本人研究者が加わるべきであること、応募全体では 40 歳代が中心であることを作業部会提案書作成で考慮すべきであるとの報告があった。委員長から国際委員である張 勁委員を</p>
--	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

様式第 2 (第12条関係)

		<p>幹事とする推薦があり、全員一致で承認した。また、委員長から「我が国の海洋科学の推進に不可欠な海洋研究船の研究航海日数の確保について」報告(案)の説明があり、全員で内容の確認をした。委員全員の最終確認を経て、親委員会(地球惑星科学委員会)、幹事会と進め、早ければ4月下旬の公表を目指すことになった。また、親委員会と幹事会からの意見等への対応は委員長に一任することを全員一致で了承した。加えて、委員長から東京大学大気海洋研究所の研究船共同利用運営委員6名の選定をSCOR分科会メール稟議にて承認されたとの報告があった。委員長からSIMSEA小委員会の活動報告があり、SIMSEA Japanを支援するワークショップ開催(2016年2月5日東京大学)の紹介があった(海外を含む約50名の参加で盛況下に終了)。この会議開催はICSUのサイトから世界に発信された。窪川副委員長から海洋学会の「小学校理科第4学年単元「海を考えよう」の新設」提言(案)の紹介があり、趣旨に賛成した。蒲生幹事からはGEOTRACES小委員会を3月29日午後に東京大学大気海洋研究所で開催するとの報告があった。</p>
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	<p>国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である</p> <p><input checked="" type="radio"/> 1. 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる定款・規程等の添付又はURLを記載 (http://scor-int.org/constitution.htm)</p>	
	<p>各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている(主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か)</p>	
	<p><input checked="" type="radio"/> 1. 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる資料の添付又はURLを記載 (http://scor-int.org/constitution.htm)</p>	
	<p>下記の事項(ア～エ)のいずれか一つに該当するか(該当するものに○印)</p> <p>ア 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p><input checked="" type="radio"/> イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの</p> <p>エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</p>	
	<p>10ヶ国を超える各国代表会員が加入している</p> <p><input checked="" type="radio"/> 1. 該当する 2. 該当しない</p>	
<p>加入国数及び</p>	<p>(30ヶ国と1地域(台湾))</p>	

様式第2 (第12条関係)

	主要な各国代表会員を10記載	・ 各国代表会員名／国名 Trevor McDougall (Australia), J,C,J, Nihoul (Belgium), Sun Song (China), Birger Larsen (Denmark), Catherine Beltran (France), Wolfgang Fennel (Germany), Satheesh Shenoi (India), Annalia Griffa (Italy), Peter Burkill (United Kingdom), David Halpern (United States)
--	----------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------